

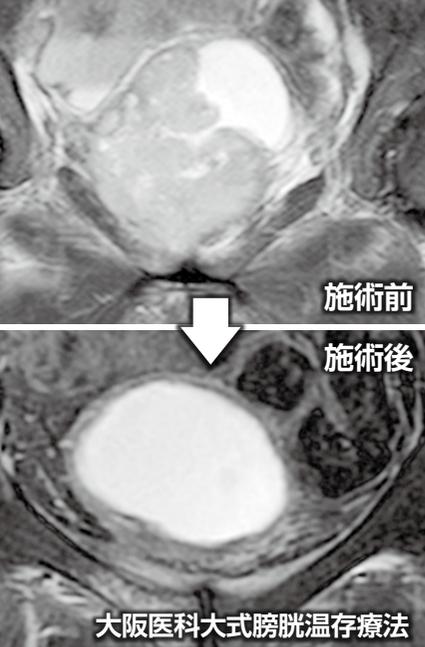


写真/共同通信社

松田優作は1987年に膀胱がんの手術を受け、完治したと思われた。しかし翌年、映画『ブラックレイン』の撮影中に膀胱がんが再発。激痛をこらえて撮影した作品の公開中に急逝した

大阪医科大学で開発されたバルーン付きカテーテルによる新療法で

松田優作が斃れ取らずに 治せる日が来た



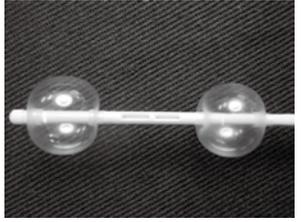
施術前

施術後

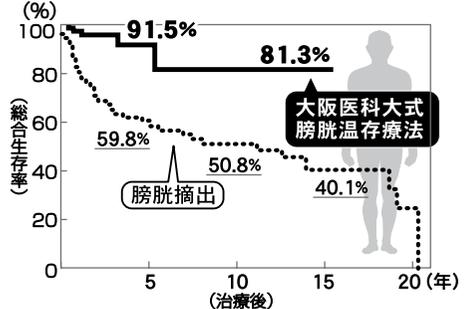
大阪医科大式膀胱温存療法

写真中央の丸い部分が膀胱。施術前、膀胱の3分の2以上を占めている灰色の部分ががん。施術後はがんが完全に消失している

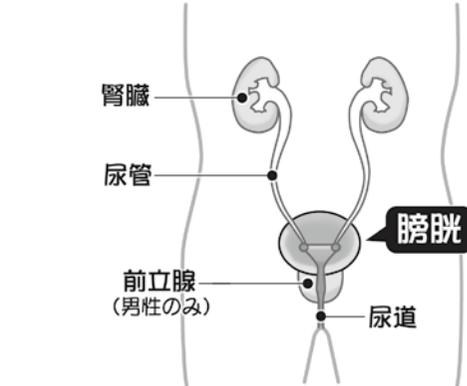
最新メデイカルレポート



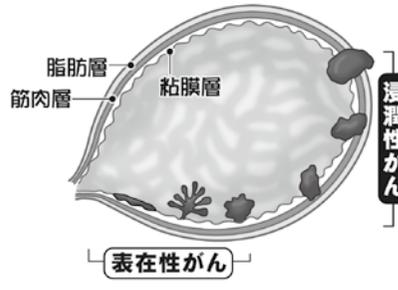
腹部の皮膚を通して、直径4mmほどのバルーン付きカテーテルを挿入。バルーンが膀胱の動脈に達したら、空気を入れてバルーンを膨らませて血流を遮断することで、抗がん剤が膀胱の中だけを循環する



大阪医科大式膀胱温存療法を受けた患者は9割以上が生きている一方、膀胱摘出した場合の5年生存率は6割に満たない



膀胱の主な役割は尿を蓄積して排出すること。膀胱がんを発症すると、血尿が出るが、血尿が連続して出るとは限らず、また、目に見えない血が混じっている場合もあるので、健康診断で見られるケースも多い



浸潤性膀胱がんは悪性度が高く、他の臓器にも転移しやすいため、これまでは膀胱を摘出するケースがほとんどだった

尿路(腎盂・尿管・膀胱)がんの中で、死亡数7割以上、罹患率も半数を占める膀胱がん。60歳代から罹患率が増加するが、男性は女性の約4倍も罹患率が高い(国立がんセンター2006年統計)。悪性度が高く、進行した場合は手の打ちようがなく、ちがった膀胱がんに対し、大阪医科大学の東治人准教授チームが、膀胱を取らずに、9割以上の確率で根治する、画期的な治療法を開発し、成果を上げている。

膀胱を取っても5年は生きられない

1989年、個性派俳優・松田優作が享年39という若さで急逝した。死因は膀胱がんだった。「この治療法が確立し、治療できていけば、完治した確率は高いでしょう」と語るのは、大阪医科大学泌尿器科の東治人准教授。その治療法とは、「大阪医科大式膀胱温存療法」のことだ。

膀胱がんは、粘膜層に留まる「表在性膀胱がん」と、筋肉層や脂肪層にまで広がる「浸潤性膀胱がん」に大別できる。約8割を占める表在性がんの場合は、従来から内視鏡手術で、ほぼ根治できるものだった。「一方の浸潤性がんでは、多くの場合、膀胱を摘出す手術が行なわれず。膀胱を取ると、尿をためる器官がなくなってしまうため、腸管などを膀胱の代わりにするが、腹部の外側にストーマ(袋状の代用膀胱)をつけ、数時間おきにカテーテルを使って『自己導尿』をするという生活を強いられることになるのです。膀胱がん患者のほとんどは高齢の男性ですから、自己導尿に慣れるのは非常に困難ですし、そもそも体力的に、膀胱摘出に耐えられないかも微妙です。もし、浸潤性がんを罹患して、膀胱摘出ができない場合は、打つ手もなく、全身に転移が起きるのをただ見守るしかなかったというのが現状なのです(前出・東准教授)」。さらに、膀胱を摘出して、術後の体力や免疫力の低下などのため、再発や転移をする確率が高く、5年後の生存率は半数である。この手に負えない現状を打開したのが、大阪医科大式膀胱温存療法だった。

「取りたくない」患者の要望が生んだ苦肉の策

この治療法が誕生したのは、15年前に大阪医科大を

2010年2月、イギリスの権威ある医学誌「ネイチャー」でも、大阪医科大式膀胱温存療法とその成果が掲載され、世界中の関係者からの注目を集めた

「取らなかつた」患者の要望が生んだ苦肉の策。この治療法が誕生したのは、15年前に大阪医科大を

訪れた50代男性患者の強い要望がきっかけだった。「どうしても膀胱を取るの嫌だ」といわれ、頭を抱えました。そこで放射線科の医師に相談したところ、子宮がんの治療などに使う「バルーン付きカテーテル(管)」があることを知りました。これで動脈の血流をせき止め、膀胱に抗がん剤を直接流し込み、循環させるという方法を思いついたのです(同前)。

膀胱と子宮はどちらも胴体の末端に位置していて、血流をコントロールしやすいという共通点がある。また、放射線科の医師は、カテーテルに関して高い技術

「当時、大阪医科大学では、泌尿器科が透析を担当していました。そこで、同時に静脈に透析を行ない、注入した抗がん剤を取り除くことにしました。このため、通常の2倍、あるいは3倍といった大量の抗がん剤を使っても、副作用を防げるのです(同前)」。施術には、泌尿器科の東医師に加えて、放射線科、透析技師など、6〜7人が立ち会った。治療は、約2時間で終了し、膀胱のがん細胞はきれいに消失した。「このがんはかなり進行していましたから、まさかここまで効果があるとは予想

大阪医科大式膀胱温存療法3つのポイント

- 膀胱につながる動脈の血流を遮断し、膀胱内だけに抗がん剤を循環させる
- 膀胱から出る静脈に透析を行ない、抗がん剤を除去する(※)
- 上記と同時に膀胱に放射線を照射し、がんを徹底的に死滅させる

※ただし、患者に体力がある場合は透析を行わず、抗がん剤を全身に循環させ、がんの転移を未然に防ぐという措置をとることも。高濃度の抗がん剤も、全身に回れば濃度が下がるため、それほど重い副作用は出ない